様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０５１８８

研究課題名（和文）国際退職移動と介護

研究課題名（英文）retirement migration and care

研究代表者
上野　加代子（Ueno, Kayoko）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：５０２１３３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：日本からの国際退職移動は今日衰退している。その決定的な理由のひとつは、社会保障制度の国内居住の制約である。現地退職者の自助団体やグループによる介護をめぐるさまざまな実践や試行錯誤も、自国の社会保障の枠内に押し戻す方向で収束している。その一方で、新たに移動する退職者、自らの意思で帰国しない後期高齢の年齢に達している現地居住者がいる。タイとフィリピンに認められる現地のパートナーが引き要因になっている移住群である。本研究は、高齢者への国際退職移動を、「sun and money」という古典的な枠組みだけでなく、後期高齢期に焦点を当て、経済と親密性のグローバルな交渉という側面から議論した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国際退職者移動の内外の研究においては、高齢者の余暇を中心としたアクティブなステージが暗黙裡にされていたが、本研究は海外の居住先で最後まで暮らせるかという局面に焦点を当てた。グローバルな移動の時代に、人々の生活を支える社会保障制度のネイションの骨格ゆえに、移動先での生活が制限される。近年、社会保障のシティズンシップの議論は、国内の外国人（労働者）を組み込んでいるが、本研究は、退職後に日本から国外に出た人たちを含める議論を開始した。

研究成果の概要（英文）：Japanese retiring in Northern Thailand has become a social phenomenon since the 2000’s but has already been declining. This is partly because our public welfare system has strengthened its nature of being national. Noteworthy in this context is that some Japanese retired males in Thailand and the Philippines dare not go back as they live with local female partners. This shows the classical framework of "sun and money" in the discussion of international retiremtment migration needs to include the intimacy and care aspect. Our study findings are placed in the context of global negotiation of economy and intimacy.

研究分野：社会学

キーワード：国際退職移動　地理的取引　介護　親密性　タイ　フィリピン

１．研究開始当初の背景

日本の高齢者は短期旅行を除いて移動しないというのが 2000 年代はじめまでの「社会通念」であった。しかし 2000 年をすぎると、日本人の東南アジアへの国際退職移動という社会現象が社会的に注目されるようになった。生まれた国で暮らして、そこで死んでいくという伝統的なライフコースではなく、外国で生活する可能性を組み込んで設計されるトランスナショナルなライフコースが、輪郭をもつようになったのである。日本人の東南アジアへの退職移動については、気候が良く、物価が安く、日本から比較的近い東南アジアで、楽しくゴルフや散歩をしながらコンドミニアムでのんびり暮らす、というのがメディア報道の基調であり、日本人高齢者が、移住先でさまざまな団体を立ち上げ、現地の問題解決志向をもち活動していることはあまり知られていない。言語のハンディをもつ高齢の日本人が、インフレや為替のリスクを考慮しつつ、長期にわたって海外で生活していくには、移住者が協力して社会関係資本を構築していかなければならない。とくに、移住退職者が後期高齢化するなか、現地での相互扶助の必要性が増してきた。国際退職移動の先行研究では、EU 圏内の域内移動に代表されるように、年中の余暇活動を可能にする気候要因と、そのような活動的な生活を保障する自国との物価差である経済要因とのバランスで成り立つことが早くから指摘され、またこのような「sun and money」が、ツーリズム、社会老年学、そして家族研究の研究の前提にもされている。しかし、これはアクティブなステージの退職者を念頭に置いたものである。アクティブでない高齢者の移住地での生存戦略についての研究は、ほとんどなされていない状況であった。

２．研究の目的

本研究は，日本から東南アジアに移動した退職高齢者の心身の健康状態レベルが低下する段階に焦点を当て、（１）帰国に向かわせる移住先の物価高騰や為替の変動、海外での医療保険制度や高齢者施設や在宅介護の問題といった構造的要因、再移動を促進する要因と阻止する要因を明らかにする。そして、（２）帰国しないことを選択したひとたちの介護をめぐる奮闘を、①個人レベル、②グループレベル、③組織レベルなどから検討する。最後に、（３）現地の高齢者が今まさに直面している介護をめぐる問題において、研究者が当事者と一緒になって取り組むアクションリサーチを実施し、海外での日本人高齢者介護の具体的なモデルを探る。

３．研究の方法

北タイとバンコク、フィリピンのダバオとマニラ、マレーシアのクアラルンプールで、現地で生活している日本からの退職者、退職者団体、邦人団体、そして帰国した東南アジア退職移動経験者に聞き取り調査を行った。なかでも、現地の高齢者が直面している介護をめぐる問題において、海外での日本人高齢者介護の具体的なモデルを検討すべく、チェンマイで暮らす退職者たちによって組織された研究会（「介護研究会」）とその実行部隊を参与観察しながら、研究者と当事者と一緒になって取り組むアクションリサーチを実施した。その一環として、チェンマイで退職移動者に対して、「北タイ在留者の介護関連調査」（有効回答 92 票）、「北タイ在住者の社会関連と健康の実態調査」（有効回答 66 票）を行った。調査結果については、国内の学会や国際学会報告だけでなく、現地で調査結果を発表する機会を作り、当事者へのフィードバックを心掛けた。

４．研究成果

2000 年代に入り、円高を背景に海外旅行への価値観も変化する中で、日本から東南アジアへの退職移動が社会現象となり、現地で個人が望む生活をしながら自由時間の活動を行うスタイルが普及してきた。いわゆる退職移動者第一世代の出現である。本研究でインタビュー調査を行ったのは主にこの世代である。このパイオニア世代は、現地で自助団体を立ち上げるなど、移住先への愛着とコミットメントが大きい。研究をはじめた当初は、この世代においては、できればそのまま現地で暮らしたいという考えを持つ人がいずれの地域でも多かった。質問票調査においても、チェンマイという限定的な場所で行ったものではあるが、将来の介護への不安は高く、介護が必要になった時は日本に帰ることを考えるひとが 4 割近くいるが、タイで家族や介護者に介護してもらいたい人のほうが多く、また現地の施設に入居希望者も１割いた。しかし、そのようなニーズが救いきれなかったのは、東南アジアでの邦人対象に設立された高齢者施設が、筆者の知る限りすべて頓挫したことと医療費の問題が出現したことによる。

高齢になるにつれ、「病気」と「介護」が緊要性のある課題として現れ、各高齢者団体がそれに対応しようとしたり、新たに「福祉」や「介護」に特化する自助団体が形成された。しかし海外は、日本の介護保険の適用外であり、また日本の国民健康保険の利用制限ゆえに、多くの人が長きにわたって形成した人間関係を手放す形で帰国しはじめ､帰国のうねりが押し寄せた。現地の邦人高齢者団体は幅ひろく活動を広げ、医療、介護問題への対応においても様々な模索があったが（健康診断等、現地病院と連携、会員の安全確認、シェアハウス、生活が難しくなったひとの個別対応)、結果的には、医療問題を抱える高齢者を、フルレンジの社会保障を受給

できる日本に帰国させる方向でのサポートになった。
　では、帰国者に替わって、新規の退職移動者が流入しているかというと、その数は少なくなっている。これには、フィリピンでの主な邦人退職者の滞在先であったダバオの治安問題（日本外務省の不要不急の渡航警告の継続）やタイでのビザの厳格化と煙害、マレーシアのビザ取得条件にみる退職者の選別強化、移住先の物価高など移住先の状況の変化が介在している。また、退職年齢の延長、年金受給年齢の上昇と減額、国民健康保険の海外使用の厚労省の抑制、日本での住宅ローンの長期化といった日本側の要因もある。円安が続いていることも抑制要因になっている。なかでも、後期高齢者の海外生活を設計する際に、国民健康保険の海外使用が制限されはじめたことは決定的であった。70 歳以上になると民間医療保険（疾病）の加入が困難になり、加入できたとしても高額になる。「円高に耐えることはできても、医療保険なしでは暮らせなくなる」といった意見に代表されるように、社会保障のドメスティックな枠組みが強化されてきたゆえに、現地での生活が途中で断念されている。
　このように、多くの第一世代の退職移動者は帰国し、また新規での移動はクレジットカードに付帯する医療保険が使える 3 ヵ月までの季節移動が主になったが、そのなかで新たに移動する退職者、自らの意思で帰国しない後期高齢の年齢に達している現地居住者がいる。代表的であるのは、タイとフィリピンに顕著に認められる現地のパートナーが引き要因になっている移住群である。高齢者への退職移動は、物価の安い温暖な地域での経済合理性（money and sun）という古典的な枠組みだけでなく、親密性の確保の要因が大きい。この経済と親密性のグローバルな交渉については、"Intimacy Seekers: Retired Japanese in Chiang Mai"の演題で国際会議(5thMMC Regional Conference, 8-9 November 2018 at IPSR, Mahidol University, Thailand)で報告した。

　本研究の知見は、日本語論文や著書や学会報告などで発表し、質問票調査については報告書を出している。現在は、英文ジャーナルに投稿する原稿（”Intimacy seekers: retired Japanese in Chiang Mai”ならびに”When geographic arbitrage does not work - limits of national welfare policies for migration retirees）を準備中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①辻京子・上野加代子・大西美智恵、2018 年「タイのホーム・ケア・プロジェクトで養成されたボランティアの活動」『訪問介護と看護』23（5）（医学書院）1－2.【査読無】
②辻京子・上野加代子、2017 年「中高齢者の山岳地域への移住における課題　－　島根県隠岐郡西ノ島町を事例に」『地域環境保健福祉研究』20(1): 61－71.【査読有】
③上野加代子、2015 年「国際移住高齢者のケア戦略――チェンマイでの調査から」『福祉社会学研究』12: 57-77.【査読有】

〔学会発表〕（計 8 件）

①Kayoko Ueno, 2018, Intimacy Seekers: Retired Japanese in Chiang Mai, The 5thMMC Regional Conference, Mahidol University,2018.11.08.
②上野加代子、2017 年「海外退職移動と国内退職移動」『シンポジウム・高齢者相互の助け合い』2017 年 12 月 9 日、チェンマイ・オーキッドホテル、チェンマイ介護研究会.
③大西美智恵・上野加代子、2017 年「退職移動と健康維持－国際退職移動者のトラジェクトリ」第 15 回福祉社会学会テーマセッション『退職移動――健康，介護，そして労働をめぐって』、日本社会事業大学、2017 年 5 月 27 日.
④辻京子・上野加代子、2017 年「島根県・西ノ島町シルバーアルカディア事業　－　再訪」第 15 回福祉社会学会テーマセッション『退職移動――健康，介護，そして労働をめぐって』、日本社会事業大学、2017 年 5 月 27 日.
⑤上野加代子・辻京子、2017 年「退職移動――介護と労働」第 15 回福祉社会学会テーマセッション『退職移動――健康，介護，そして労働をめぐって』、日本社会事業大学、2017 年 5 月 27 日.
⑥大西美智恵・上野加代子、2017 年「北タイで暮らす日本人介護ニーズ」『公衆衛生看護学会大会』2017 年 1 月 21 日.
⑦上野加代子・大西美智恵、2016 年「北タイ在住者の介護関連調査報告」『シンポジウム・チェンマイで終活を考える』2016 年 12 月 10 日、チェンマイ・オーキッドホテル.
⑧大西美智恵、2015 年「日本の高齢者介護はどうなるか」2015 年 8 月 21 日、チェンマイ YMCA、

チェンマイ介護研究会.

〔図書〕（計 2 件）

①上野加代子、2015 年「移動する　―　グローバリゼーションがもたらす新しい世界」(pp.218―231）,伊藤公雄・牟田和恵（編）『ジェンダーで学ぶ社会学【全訂新版】』世界思想社,
②上野加代子、2015 年「ネットワークのなかの家族」(pp.111-132),「グローバル化のなかの家族」(pp.133-152)清水新二・宮本みち子（編）『家族生活研究（'15）―家族の景色とその見方』放送教育振興会

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　https://ueno-kayoko.org/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：大西　美智恵

ローマ字氏名：Onishi Michie

所属研究機関名：香川大学（2018 年 3 月 31 日）

部局名：医学部看護学科

職名：教授
研究者番号（8 桁）：30223895

(2)研究協力者
研究協力者氏名：廣瀬　豊邦
ローマ字氏名：Hirose Toyokuni

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。